

農家出身でない20～30歳代が、農業に関連したビジネスに挑戦する例が目立ってきた。新規就農後に農作物の販売会社を設立したり、農業法人に就職したり。農業に新しい可能性を見いだそうとしている。

（西内高志）

農業ビジネス 挑戦する若者

も増えている。2年前から東京都内で年に3回開かれている合同説明会「アグリク」には毎回、70、80人が集まる。理学部や法学部などの学生や大学院生も参加。昨春は10人が各地の農業法人に採用された。今春も15人が就職する予定だ。

大学で国際政治を学んだ妹尾侑樹さん（25）も2年前、説明会を通して、「こと京都」（京都）に就職した。京野菜の九条ネギの生産から加工、販売まで手がける農業法人だ。「食に関心があり、自ら作る側になつて良い

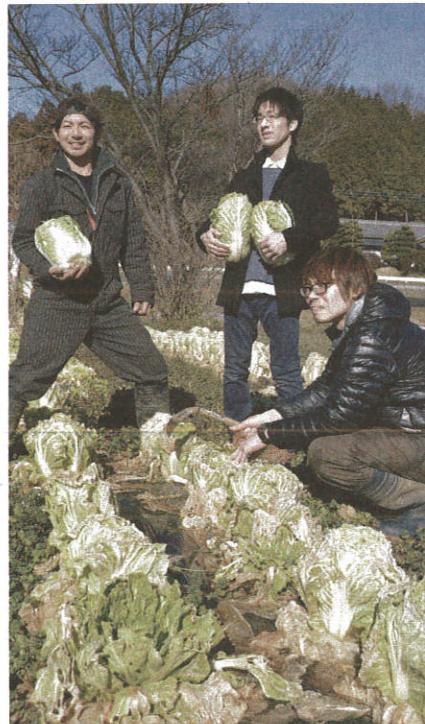
会社設立や法人に就職

市内の洋菓子店やレストランの一角を借りて収穫物を販売し、顧客を開拓。現在、レストランや居酒屋など10店舗以上に販売するほか、中華料理のチキン店にも卸している。船木さんは「農産物を通して、地域の活性化にも貢献したい」と話す。業績を伸ばす農業法人に就職し、力を発揮しようとする学生

「FIO（フィオ）」は、年間約50品目の野菜やハチミツなどを販売している。市内で就農した船木翔平さん（27）と伊藤宏さん（27）、就農を目指す大神辰裕さん（32）の3人が、自分たちで作った農産物を自分たちで販売しようと設立した。

東京都八王子市の株式会社「FIO（フィオ）」は、年間約50品目の野菜やハチミツなどを販売している。市内で就農した船木翔平さん（27）と伊藤宏さん（27）、就農を目指す大神辰裕さん（32）の3人が、自分たちで作った農産物を自分たちで販売しようと設立した。

借りている農地で取れたハクサイを手にする船木さん（左）。「農業を通じて地域に貢献したい」



ぷらざ

年末に急須が壊れた。茶殻が流れないように内側に取り付けてある網が外れ、うまく元に戻せなくなつたのだ。
ある年から、お正月に帰省

義父の名残の急須にお別れ

ものを提供したいと思った」と話す。ネギを使ったドレッシングなどの通販事業に携わる。

農業を教える学校もある。農業ビジネススクール「アグリイノベーション大学校」（東京、大阪、愛知）は、社会人も学びやすい週末に開講。加工や販売、ブランド化など幅広く学べるコースがある。農家出身でないと農地を借りるのが困難だが、その支援もある。4年前の開講以来、400人以上が受講。半分以上が20、30代だという。

ウェブ制作会社を経営する成

田和正さん（30）は、この学校で農業を学んだ。今年、横浜市内で農地を借りて就農し、野菜栽培を始める予定。関係するギャラリーの喫茶コーナーで料理を出したいという。

農林水産省の新規就農者調査では、農家出身ではなく就農した20～30代は、2007年度の約560人から、13年度は1430人に増えた。「アグリク」を企画する「ネクト・アグリフード・ラインズ（東京）の社長、熊本伊織さんは「国産の農産物への関心が高まつたりして、農業に可能性を感じる若者は多い。生産地と消費地をつなぐ役割を担いたい」というケースも増えている」と話す。